# 艦これ短編集

マロニー

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

時たま書いたものをちまちまと投稿していくだけの物です。

基本的に話に繋がりはありません。

また、ものによってはグロテスクな表現があります。

ギャグ、ラブコメ、シリアスごった煮です。

# 目次


夜に向かって 1
ある鎮守府の話 8
罪と罰 13
狂人は笑う 18
白馬で王子様 24
青い、青い。 29
雪空に願ふ 33
服の透ける眼鏡 40
メルト・ダウン 47
この想いを言葉にするのなら 54
嘘でも良い 64
朝潮は尋ぬ 69
朝潮は冀う 76
朝潮は拾う 84

# 夜に向かって

雑音混じりの内線が鳴る。
壊れかけたその機械を手に取り、男は話す。

「そっちの損害は、どうだ？」
『大中破が４人、その他軽微な怪我をした娘といった所です。…幸いにも、沈んだ娘は誰も居ません。…提督の指示の賜物です。』
「…そうか。そいつは良かった…」
『…提督、まだ執務室にいるんですよね…!?
今すぐに救護を送りますから』
「いや、大した怪我じゃあないし、そっちも忙しいだろう。救護の必要は、無いよ。それじゃあ、無線を切るぞ」
『!!提と…』

大淀が焦りと疲労の滲む声を出していたが、それをすべて聞かずに、通話をそのまま切る。
通話を切ると、それまで気を張り、気丈に立ち、振舞っていたその男は、壁に寄りかかりながら座り込んでしまう。
額の汗と血が目に入り視界を妨げるが、身体がとても重く、それを拭う事は出来なかった。
沈んだ娘は誰も居ない。
その言葉を聞き、ようやく荷が降りた。ようやく、やるべき事が全て終わったように思えた。

「…バカね、あんた。
わざわざ救護を断る必要もないじゃない」

そう口を出してきたのは叢雲。
運悪く、本日秘書艦だった駆逐艦である。
彼女もまた、壁にもたれかかりつつ喋っていた。

「…この様を、見れば解るだろ。
手当ての為、労力を割く必要なんて無いって」
「…そうね。お互い、ね。」
「な、さっきの判断は正しいだろう？」
その言葉に、彼女は苦笑のみで答える。
その顔を見た提督は、嬉しそうに微笑んだ。
そして、ふと思い、内ポケットにある煙草に手を伸ばす。
が、血でべっとりと濡れたそれは、本来の役目を果たしそうには無い。
非常に残念ながら、最後の喫煙は断念するしかなさそうである。
それからしばらく、一人の男と少女の間には、沈黙が立ち込めた。
破壊された部屋の中に立ち込めた沈黙。
それを破ったのは、男の方だった。
「…思えば、此処から俺は。『提督』は始まったんだよな」
急にそう言った提督を訝しむ叢雲を横目に、提督は改めて自らの居る部屋を俯瞰的に観つめる。
そしてノスタルジィな気持ちで昔を思った。
家具が揃いきって居ない殺風景な部屋。
机すら無いほどの、仕事の為だけの部屋。
此処が本当に執務室なのだろうかと思う程の、中々に酷い状態の部屋だった時を。
何とか軍備を整え、未熟ながら指揮し、そして数えきれない手紙を書いた事を。
「で、此処で俺は終わる訳だ。…全く、何とも締まらない、書類に追わ

れた提督人生だった」

「それじゃあ、もっと特攻とかして格好良く散華したかったの？」

「…それはそれで、嫌だな」

「…我儘ね」

今度は提督が苦笑で返す事となった。
思考はもう少しの間、過去へと移る。
そして彼はもう一つ、大事な事を思い返した。

「…そういえば、お前に。
最初の艦娘に会ったのも此処で、だったよな」

「…そうだったわね」

「…なあ、お前、覚えてるか？駄目駄目だった俺をバシっと叩いて、喝した事」

「…さあ、覚えてないわ。あんたに喝した回数なんてとても数えきれないもの」

「酷ぇな、最近はちゃんとしてたろうが」

「全然、まだまだだったわよ」

「はは、何とも手厳しい…それでも、どうだ？さっきの俺の軍刀捌きだけは中々のものだったろう」

「…見てなかった」

「そりゃ、残念。化物を撃退した勇姿を、是非とも、お前に見てもらいたかったのになぁ」

「…そうね。私も見てみたかった。
司令官、の――――」

その先の言葉は、男の、提督の血泡を伴った咳によって掻き消されてしまった。もう一度だけ言うよう頼んでも、叢雲は少し恥ずかしげに口をつぐむのみだった。

そして、再びの静寂。

それが破られたのは、二人の鼓動が静かになりつつある頃。再び、提督によるものだった。

「なあ、叢雲。
…ちょっと、こっちに来れないかな？」

「……？」

「…情けないがな。
手を、握って欲しいんだ」

「……」

「……怖いんだ。」

「…なにが？」

「人を殺した者は、地獄に行くという。

…なら、俺は何処に行く？
地獄の特等席か。更に、酷い所か？」

「…身体が動かないわ。
そっちに…行けそうにない…」

「…そうか。…すまんな。
最後まで、情けない所を、見せてしまった。
今言った事は、無かった事に…」

「……」

「…叢雲？」

返事が返ってこない。
もう一度、もう二度と、何度か呼び掛けたが、同じ事だった。

「…なんだよ。俺より先に逝っちまうのか」

そう愚痴をこぼし、彼も眼を閉じようとした。

その時である。ふと、誰かに手を握られたのは。
視覚も、触覚も、聴覚も。
全ての機能がほぼ停まっている筈の提督に、その感覚は感じられ、
そして、その声は聞こえた。

あんたは確かに地獄行きかもしれない。
でも、安心していいわ。
地獄に堕ちるのはあんただけじゃない。
地獄に行くのは私も一緒。
私も奴らを殺しすぎた。

だから、一緒に堕ちていきましょう。
何処までも一緒にいましょう。
どう?それなら、怖くは無いでしょ?

(ああ。確かに、そいつは心強い。
そんなら、怖くはない)

必死に身体に力を入れ、もう何も見えない筈の眼を、いっぱいに開ける。
するとそこには、彼の頼れる、そして、愛しい初期艦が座り、微笑みつつ手を包んでいた。

(だから、安心して眠りなさい。
怖がらなくていい)

(…ああ。ありがとう、叢雲)

(…こちらこそ、司令官)

そう言って、笑い合う。
不思議と身体は軽かった。

そして彼は再び目を閉じた。
二度とは開かないのだと、そう思いながら。

(おやすみなさい)

(ああ、おやすみ)

そうして彼は総てを終えた。
疲れて眠りについた、子供のように。

ただ安らかに安らかに、その目を閉じたのだった。

終わり

# ある鎮守府の話

「じゃあお願いします、時雨」

「…うん」

ある提督が部下である艦娘に命令をする。その光景は、数ある鎮守府の、どこにでもある光景だ。

ただ異なるのは、他人行儀に接する提督と、接されるその娘には同じ指輪が光っている事。娘は哀しげで、疲労に満ちた顔をしている。

対し提督は、申し訳無さそうな顔を。

彼の中には、伴侶となった娘の記憶は無かった。

こうなってしまったのは、そう前の事では無い。

ある日、ある朝。幸せに目を覚ます筈だった提督は、日常生活、身の回りの事、その他事務関連の事諸々…

それらを除き、全ての記憶を失ってしまっていたのだ。

ストレス性の精神障害、突発性のもの先天性のもの…さまざまな診断がされたが、事実は何も変わらない。事実として、彼は記憶を失ったのである。

戦争の途中であるが為に人手が慢性的に不足している日本軍本部は、指揮能力は未だ持っているとの事で彼を提督へと任命したままにした。

その判断は、提督本人にとっても辛いものとなる。

彼の配下の、彼を慕う部下の娘達は酷く悲しみ、ありとあらゆる方法で記憶を取り戻そうとした。

特に、その喪失の数ヶ月前にケッコンをした時雨。

彼女もまた非常に悲しみ、精一杯に全てを元に戻そうとし、そして、提督もそれに精一杯応えた。

だがしかし、それらは全てが身を結ぶ事は無かった。
その行動の末、彼女達は彼を『元に戻す』のでは無く、また新しい『彼』を認めようという事になった。
苦渋の決断ではあったものの、そうでもしなければ彼も彼女らも、その関係までもがいつの日にか破綻してしまっていただろう。
提督は戸惑いつつも、それでも出来る限りにそれに順応、適応した。
そして、全てが仮初めにも元どおりに成った。

…そう、誰もが思っていた。
だが、そうは成らなかった。
王様の馬と王様の家来を全て集めても、
ハンプティ・ダンプティは元に戻せない。
そして、ハンプティ・ダンプティは再び砕け散る。

新しき彼を皆受け入れ、その生活が当たり前になりつつあった頃、それは起きた。男の記憶が電源を切ったかのように、あっさりとリセットされてしまった。
部下である娘達は再び絶望に襲われ、悲嘆に暮れた。
伴侶である時雨も、ようやく心に折り合いをつけた矢先のこれに、心が折れかけてしまった。
それでも、彼女らも、彼女も。諦める事はなかった。
いつか平穏なる日々を、平穏な海を。
そして、『提督』との思い出を胸に秘めて。
彼女達は化け物と戦いながら、彼と思い出を作り、彼を慕い続けた。

何度も、何度でも、何十回も。

幾ら記憶の硝子細工が砕けてしまおうと、その細工を拾い集めて、

直し続けた。

その度にその度に、彼女らも、提督も精神が摩耗していくことを感じながら、それでも直し続けていた。

誰もが、彼が彼で無くなる事など。

そんな事を認めようとしなかった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

――？

「何を……！　何を、やっているの!?」

「……やあ。遅かったね」

そして、ある日の事。

提督は冷たい死体と化した。

戦争の流れ弾でも、深海よりの刺客でも無い。

下手人は直ぐに見つかった。

死体の、直ぐ隣に居た者だった。

秘書艦であり、伴侶である時雨。

彼女がそれだった。

彼女は、第一発見者によると、絞められ、青紫色に染まった首を持った、動かぬ提督を膝に乗せ、幼子にやるように微笑みながら頭を撫でていたのだという。

本部へと連行された彼女は、如何に取り調べを受けようとも貝のように口を閉ざしていた。

しかし、彼女の元同士が…彼女の元同僚達が話を聞きに行くと、述

懐を始めた。

あの日。
提督は全ての記憶が戻ったのだと。
皆無とも近い確率の幸運の先に、それは起こったのだ。

時雨が喜ぶ暇も無く、提督は言った。

私はこのまま、愚かなまま老いさらばえたくは無い。
そして、このまま、皆を傷付けるような者でいたくは無いんだ。
きっと私は、またいつか記憶を失うだろう。
だから、頼む。その前に。

君のその手で、私を殺してくれ。

当然の如く、彼女は猛然と拒絶した。
泣いて、哀願して、嫌だという意思を伝えた。
それでも彼は考えを変えなかった。

嗚呼、それが『命令』ならばどれだけ楽だっただろうか？
ただ、命令に背けばいいのだから。
しかし、それは『依頼』だったのだ。
頼り、信じ、そして愛している伴侶への、切なる頼み。
その愛に背く事は、彼女には。
…時雨には、できなかった。

そうして彼女は首を絞めた。

数秒毎に力が弱まり、体温が失せていくのも解った。目の光はみるみる薄まる。それでも絞め続けた。
自らをも殺し、絞め続けた。

そして提督は最後にこう、言ったという。

「君に最後まで辛い思いをさせて、済まない」

全てを語り終えた時雨の目には、何の感情も浮かんでいなかった。

最後に、その話を聞いた艦は問いた。

「それで良かったのか」と。

時雨は答えた。

「うん。…これで、良かったんだ。僕は、幸せだよ」と。

そう言って、笑ったのだという。

それに対して「本当に？」と問うことは出来なかった。

愛する人を救う為にその人を殺した、その両の腕を今も見つめてる彼女が。愛した者を殺すしか出来なかった自分を、どうして良いと思えるだろうか。

…そして、なにより。

涙をぼろぼろと流し語るその言葉を、どうして本心だと思う事が出来ようか。

彼女にはただ、その場を去ることしか出来なかった。

背中に歔欷する音を浴びつつ、虚無感と共に鎮守府へと帰る事しか出来なかった。

これは、ある鎮守府のお話。

数ある鎮守府の、一つのお話…

終わり

# 罪と罰

（横恋慕が罪なら、この苦しさは罰なのかな？）
知らぬ間に落ちているのが初恋なのだと、誰かが言っていた。それを小馬鹿にしていた自分が、今はただ羨ましい。

私がここに…
この鎮守府に着任したのは、大井っちより結構遅れての事。
だから、着任した時は凄かったなぁ。秘書艦として居た大井っちが飛んでくるんだもの。練度に差もあったし痛かったのなんの。
それを見て困ったように苦笑する提督も、その顔に浮かぶ喜色を隠しきれてなかったね。

着任して暫く。
出撃や訓練の日々をここで過ごしていく内に、色々な事が分かっていった。
在任してる艦娘の数。
いつもカツカツの燃料。
食堂の利用についてのルール。
提督の人柄、苦悩。
そして、大井っちの練度が１００を超えている理由。左手に光る鈍色の指輪。大井っちの一番が既に私では無い事。

…それがショックだったかって？
ううん、全然。むしろそれは、親友として心から嬉しい事だった。
私に囚われている大井っちは見てて痛々しく、辛かったし、そう思っている私を大井っちは当然喜んでもくれなかった。だから、もう私は彼女の枷にならない事を分かった時は素直に嬉しかった。

それもあってね。この鎮守府に来て暫くは、本当に幸せだったんだ。
気のいい同僚、美味しいご飯。
吹っ切れた様子で、明るい親友。
愚痴のように、私に惚気る親友。
うぶで気弱だけど、実は根性のある提督。
優しく、私なんかにも気遣ってくれる提督。
お人好しで、私達が傷つく事に傷ついてる提督。
無理した時は本気で怒る提督。
いつも困ったような顔をしてるけど、たまに見せる笑顔が素敵な提督…

……いつからだっけな。
いつも隣にいる大井っちにじゃなく、あの人に…
提督に目がいくようになったのって。
言い訳にしかならないけど…
…気が付いた時には、もう手遅れだった。
もうすっかり私は、甘くて苦い、決して抜け出せない泥沼に嵌まり込んでしまっていた。
嵌った泥沼から、抜け出せなくなっていた。
…泥沼から、抜け出したくも無くなっていた。

この感情を自覚しちゃったのは、提督と大井っちの…いわゆる、夫婦の営みを。偶然見た時。
夜、喉が渇いて起きて、水でも飲もうとした時に見てしまった。
その時私が抱いた感情は、申し訳なさでも、見てはいけない所を見てしまった気恥ずかしさでも無く、只ドス黒い感情だった。
嫉妬、憎悪、憤怒…
…他には言葉が思いつかないけど、取り敢えずそういう感情。
最初はそんな感情を抱く自分に困惑した。いけない事だと思って、寝床に戻って深呼吸とかもして、心を落ち着かせようとした…

でも、落ち着けなかったや。
…その時はっきり解っちゃった。
私は提督が好きなんだ。
もうケッコンしているとか、愛の発露の現場を見たとか、親友への裏切りとか、そんな事じゃどうしようも無いくらいに。
理屈と論理と倫理じゃあ抑えきれないくらいに、理不尽なくらいに、提督が好き。好きになってしまった。

…そして同時に解っちゃった。
どうしようも無いくらい、この愛は届かないって事も。

初恋は甘酸っぱいなんて大嘘だよ。
苦くて苦しくて辛くて…そんな事、今はどうでもいいか。

ともかく、その日は一晩中泣き明かした。
たはは。翌日皆に心配されちゃったよ。

それからは、今迄がウソみたいに辛かった。
地獄って言ってもいいかな。
それまでタブーとして封じ込めていた想いが、自覚を境に押し込めきれなくなった。
それと同時に、親友を裏切っている背徳感、親友の恋人への横恋慕の罪悪感。大井っちと自分を比べ、優っている所を見つけ優越感に浸る私自身への自己嫌悪。
それはまるで壊れた蛇口みたいに。
そんな風にマイナスの感情が吹き出していって。そんな考えをする自分が只々嫌で。

それが無意識に分かっていたのか、大井っちは私に少し警戒しているみたいだった。
前みたいな惚気は言わなくなり、やけに他人行儀になっていった。

僻んだ私の被害妄想かもしれないけれど、目の前で提督といちゃつく事も多くなった様な気がするんだ。

どんどん、どんどん。
どんどんと、どんどんと、どんどんと。

私から離れ、提督を私から離し。
私も大井っちから離れて行く。

そしてだんだん、だんだん。
私の親友への想いは、黒いモノへ変わっていった。

…不思議だなぁ。
愛情と憎悪はこんなに簡単に入れ替わるんだね。

そんなある日。
夜中、眠れずにいる提督が、同じく眠れずにいた私と鉢合わせ。で、ちょっと話をした。

提督は、疲れてるみたいだった。
他の子とあまり会話をするな、北上とは特に…
なんていう、無茶な要求。
その他の、異常な束縛。それに心労を感じているようだった。

頭の中で何かが切れる音が一つ、して。

私は、困った様に笑うその唇に、唇を重ねた。
頭を抑え、舌を絡めた。

……

気を浮つかせ、倫理に背かせる。浮気、不倫。それは間違いなく罪だ。救いようの無い、罪業だ。
ならそれをした私に、いつかまた罰がくるのかな？
救いようの無い罪にはそれ相応の、救いようの無い罰が下される？

「ねえ、提督」

…それでもいい。それでもいいから、今はただ、この甘い罪に溺れていたいんだ。未来の無い…いや、始まってすらない関係だとしても。それでも今は幸せなんだ。
だから、私は…。

「私、貴方の事が好きだよ」

……

「……そう。」

おわり

# 狂人は笑う

「残った敵は？」

第三水雷戦隊の一人を務めた艦娘、川内。
彼女は夜闇を僅かな灯りで照らし、僅かな弾薬と最早戦う余力を残さぬ身体、満身創痍の仲間と共に立ち尽くす。

「…目の前にいる奴らで終わり、みたいです」

「そりゃあ、たまんないね」

思わずにやける。
成る程、その報告は『残存戦力無し』『相手は余力を残している訳では無い』という意味ではある。
だが、目の前の雲海の様な数の害獣を前にし、『これで終わり』とは。
まるで直ぐにでも終わらせてしまえるような。
そんな表現にしたのは、偵察を行った艦のせめてものジョークか否か。

「…撤退。それしか無いね。…でも」
「…それが出来れば、良いんですが」

誰がどう見てもそれは無理であろう。
無謀という言葉ですら言い表せぬ。
蛮勇ですらない。最も近い言葉は自害
このまま撤退するというのはつまり、そういう事だった。

「でも、だからといって突っ込んでいって、皆が死ぬっていうのは駄目

だよ。せっかくの楽しい楽しい夜戦が台無しになっちゃうもん」
「…提督にもきっと怒られてしまいますね」
「はは、あの人は口煩いからねえ」

さて、軽口の間にも雲海は彼女らへと近づく。彼女らを仕留めんとするため。彼女らを一人残らず殲滅し、敵の戦力を確実に削りとる為。

嗚呼、その圧倒的なまでの物量の差。
それはまるで津波に引き潰される小舟のような。
抗うべきもなき、その数の蹂躙を。
彼女達はただ受けるしか無いのである。

…普通なれば。

ちらり。川内は仲間たちを振り返る。
もう一度、ちらり。横にいる吹雪を見る。
も一つじろり。敵を見据える。
最後にぎらり。夜を睨む。

嘲るように煌めく三日月。
死神が彼女らを憐れむ唄を歌っているようだった。

（嗤えるものなら、嗤ってみろ）

心で一言、啖呵を切る。

自己の命を護りたいという本能を。
この瞬間、狂った意地が優った。

「吹雪。他の娘らを連れて帰投。出来るよね」

「…え？出来ます、けど、何故…？
川内さんがしてくれるんじゃあ」

「私？…私は誰かを導くなんて柄じゃないよ。
私が出来るのは、殿を務める事と――――」

夜戦だけ。

そう言う彼女の目を見て、吹雪は背筋が凍る。これが本当に、あの川内なのか。否、これこそ彼女であり、今それを知っただけか。
では、私が知っていた彼女は何だったのか。
そのどれも言葉に出来ず、代わりに一言。

「…無事、帰ってきて下さい！」

返事は返って来なかった。
元より求めていなかった。
それを交わす言葉の最後とし、吹雪は、その仲間を拠点へと戻すべく。戦友と共に戻るべく疾走り出した。

ただ最後に。
自ら死地へ赴いた…殿を務めた彼女の頬を。
その頬の雫を。三日月が照らした様な気がして。

吹雪は、それを川内に…本人に確かめたい。と。
強く、そう思った。

「…『命捨てがまるは今』なーんて。

柄にも無く、そう思っていたんだけどな。
さて、武器を鑑みる。
魚雷。残数不足。
砲弾。無駄撃ち厳禁。
指。動いて、抉れる。
足。蹴って、隙は作れる。
顎。噛んで千切れる。
頭は爽やか、心は風。
心は冷静、身体は熱く…と続けたかったが。
冷たい夜風に当たり続けた身体だ、お世辞にもベスト・コンディションとは言えない。
だがまあ、ベストでは無いのが闘いだろう。
そう自らに言い聞かせ、目を閉じる。

…ふと。
最後の吹雪の一言がフラッシュ・バックする。

「…もー、あんな事言われたら、生きて帰りたくなっちゃうじゃん」

死神の憐憫は雲に隠れ、今や無い。何かの間違いで、共に敵群も消えてしまわないかと願ったが、叶いそうもない。
さて、そうしていると。
深海共が帰投して行く仲間を追おうとする。
一人足りとも逃がさない。成る程、当然の事だ。

そう、だからこそ。殿（しんがり）が居る。

雷火の如く。追った敵を砲で撃ち飛ばす。
川内に向けられるのは敵意、害意、殺意。
それらが綯い交ぜに成った視線。
川内はそれを悠然と受け止める。

今の火撃の目的は『コイツをどうにかしないと退いていく奴は追えない』と。そう思わせる事。
どうやら、それは成功した。

「ツれないなぁ…
あんな娘達を追うなんてつまらないでしょ？それよりも…」

通じないだろう言葉を語りかける。
幸いにも、敵は何かを読み取ってくれたように此方へと武器を向ける。
挑発の意図が伝われば充分だ。

さあ、後はある一言を言うのみ。

彼女はその一言を最後に、
正気と狂気の境目を曖昧にすると。…そう、決めていた。

川内は、言う。

「…さあ。私と、夜戦しよ？」

嗚呼、彼女は闘いに狂う。
闘いに、血風に、闘争の時相に、自ら狂う。
狂った女は顔を上げ、血を巻き上げる。
硝煙を、弾薬を、肉を撒き散らして進む。
望んで狂った女は、手足を捥がれても闘う。
虐殺こそが産まれた意味でもあるかの様に。
楽しい、楽しい。待ち望んだ夜の戦。

口を歪める。三日月が、そこに移ったように。

笑う、笑う。

狂人は、笑う。

終わり

# 白馬で王子様

私はずっと、怖かった。

何かが怖いというより、何もかもが怖かった。誰かと話す事も戦う事も自分より大柄な男の人と話す事すらも。

だから司令とはまともに話した事は無かった。

報告や択捉ちゃん達に付き添ってならば話せたけど、それが本当にまともに話したと言えるだろうか。

そんな怯えっぱなしの自分が嫌で、嫌で。

だから鎮守府の近くでお祭りをやるのだという事を聞いても、最初は乗り気にならなかった。

海域を取り戻す事が出来た事をお祝いしての、地元の人たちが行う夏祭り。それすら怖く感じていた。

屋台が出すだろう食べ物に惹かれたというのも少しはあったかも。でも行く気になったのは、ひょっとしたらそんな自分を変えられるかもしれないなんて思ったから。

だからその時、私は後悔していた。

多くの人で賑わう夏祭りは、一緒に来ていた姉妹達から私をあっという間に置き去りにしてしまった。

喧騒の中、必死に名前を呼ぶ。

でも、声はかき消されて誰の耳にも届かない。

何度か試してみても無駄だった。今になって考えると、私の声がとても小さかったからというのもあるのだろう。

周囲の人は往来で立ち尽くす私を殊更に責めたりなどはしなかったけど、関わり合いになろうともしてくれなかった。
目の前にはただただ無機質な人混みが続いているのみだった。
目の前が暗くなるような感覚がして、足を止める。足がすくんで絶望感に襲われる。
そして、目の奥から涙がこみ上げてくるのを感じた…その時。
「あーっ！松輪、みっけた！」
頭の上から声がかかる。その声は聞き覚えがあったけれど、その時の私は困惑していて、てっきり白馬の王子さまかと思ってしまった。
顔を上げると、そこには佐渡ちゃんが。
…そしてその下に佐渡ちゃんを肩車している、司令が居た。
「なっ！言う通りだったろ？
きっと、松が泣いちまってるって！」
「いやいや、良く見ろ。泣いてなんかないさ。
ほら、ちゃんと出来てるものな？」
そう、話しかけられて。一気に情報が入ってきてパニックになっていた私は、咄嗟にコクコクと二回頷いた。それを見ると彼は嬉しそうに破顔した。
「よし、偉いぞ。
ほらな佐渡。これで綿飴は一個だけだ」
「ちぇーっ、賭けは負けかー。せっかく松の分も買ってやろうと思っ

てたのに」

「ああ、なんだ。そういう事だったのか？
ならそう言ってくれれば良いのに。仕方ない、ここは三つ奢ってやろう」

「お、やりぃ！
あまりのもう一つはこの佐渡様の分だよな！」

「いいや、俺の分さ。
ついつい食べたくなってしまった」

そう、頭の上の佐渡ちゃんと話してから司令は。優しく微笑んだまま私にそっと手を伸ばした。

「さ、一緒に行こう。
択捉達と合流出来るまで手伝うから」

おずおずと、ゆっくりにしかその手を取ることが出来ない私を、それでも司令はにっこりと笑いながら待ってくれた。
ようやくその手を取ると、
ゆっくりと握って包み込む。

「さあ佐渡、松輪。お前達二人の特権だ。
合流するまで好きな物を食べるといい」

「！マジかよ！
んじゃ焼きそばとたこ焼きと！あと…！」

元気いっぱいに注文を話す佐渡ちゃん。
私が何も言えないで固まっていると、司令は握った手をほんの少し

だけ強く握って。
そして、何も言わずにいてくれた。
「…その、あ、甘い、ものを」
「そうか。なら、あんず飴なんてどうだ。
べたべたになるかもしれないけど、甘いぞ」
そのまま私は司令にあんず飴をいただいた。
甘かったはずだけど、味を覚えていない。
その後私達は何とか択捉ちゃん達に合流する事が出来た。
皆心配してくれてたようで、でも皆で探したらそれこそまた迷子が増えてしまうからと悩んでいたところ、司令が通り掛かり、声をかけてくれたのだという。
そうして、気を取り直し姉妹達と一緒に祭りを楽しもうという少し前。私が一人になったその一瞬。司令に改めてお礼を言おうとすると、彼はまた少し笑って言う。
「お礼なら俺じゃなくて他の皆にな。
俺はただ手伝っただけだ。佐渡が頭の上から探さなきゃ見つけられなかったし、そもそも皆が頼まなければ俺は何もしなかった」
だから礼なら皆に。そして出来るなら、このお祭りを一生懸命楽しんでこい。
そう言って私の背中をポンと押すと司令は人混みの中に去っていった。
私は、今度は択捉ちゃんたちとはぐれてしまわないように急いで後を追った。
鼓動が弾んだのは走ったからと、始めは思った。

……あの時、私を見つけてくれた時。
王子様だと思った、あの時。
乗った佐渡ちゃんが王子様ならきっと、司令は白馬だったのだ。
王子さまと一緒じゃなくても、私をきっと見つけ出して連れ帰ってくれる、そんな白馬。

初恋だった。

私は白馬に恋をした。

おわり

# 青い、青い。

僕はずっと、英雄（ヒーロー）になりたかった。

この国が戦う、化け物達を。深海から来る人類の敵を退治する、そんな英雄に。

僕はずっと憧れていた。

子供特有の全能感から来るそんな憧れは、僕が育っても消える事は無かった。いや、寧ろ日に日に増していっていたように思える。

だから、艦娘を指揮する提督にならないか、と問われた時は、使者の方に二の句を継がさずに是の旨を伝えた。

喜んで、従軍する事にした。

その頃には、英雄になりたいなんて事を言う僕に対して冷たい視線を向ける者は多かった。夢の見過ぎ、志は良いが、現実を見ろ、と。

友人も、上司も、親も、皆そう言った。

それは当然の反応だし、僕自身、その夢を語る事が情けなく思い初めていた。

ただ、この頃。初めてそんな稚気じみた夢を笑わず、真剣に聞いてくれた娘がいたんだ。

「凄いです、立派です。これから一緒に頑張りましょう」と。目を輝かせ、その青い長髪を揺らし、僕よりも嬉しそうに僕の夢を語ってくれた。

それから僕の、僕たちの提督業が始まった。

慣れぬ作業も、ひたむきな初期艦のお陰で何とか慣れるまでに至る。ようやく任務を遂行出来てひとしきり喜んだ事も今は懐かしい。

初めはその娘だけだった鎮守府も、手を取り合いながら、日々を必死に暮らしていくうちに大所帯になっていった。

空母や戦艦も揃い、軍事力は肥大し、駆逐艦しか居なかった鎮守府は影も形も無くなっていた。
勿論指揮した作戦全てが成功した訳では無かった。だが、それでも勝率は高く。
それが英雄願望を満たしてくれていた。
そのまま僕は、そこで止まっておけば良かったのだと思う。
そこで満足して、自慰的な戦いを継続しておけば良かったのだとつくづく思う。

ある日。僕はある光景を見た。
戦場へと持ち込んでもらった映像機器が、捉えてしまったその光景を。

その日から、僕は僕の価値観を、願望を、夢を。自問し続けていた。
ヒーローなんて物は、元々は傲慢にこそ価値がある。自分の正義を押し付け、自分の価値観に照らし合わし悪である者を捩じ伏せて、自分が善だと思いこんでいるものを盲目的に守る。
では、英雄（ヒーロー）たるものは果たして本当に正義なのか？

そんな考えをすればするだけ、あの日の光景が何度でも蘇って来た。
あの、泣いて命乞いをしてきた深海棲艦の姿が。何度でも脳裏に蘇った。

例え酒に酔おうともそれは幻覚として現れて、享楽や快楽に塗れようとしても、脳髄はそれを忘れ去らせてはくれなかった。
英雄には傲慢さや、善の価値観を押し付ける強さが必要なのか、ずっと考えてきた。
何てことは無い。僕はただ、罪悪感に耐える事にいられない、半端者なだけだったんだ。

それに気づいたのは、気づけてしまったのは。
幸運だったのか、不幸だったのか。

そのまま僕は、提督では無くなった。

大本営からの打診があったのだ。その戦力を使わないのであれば今すぐに譲れと。

二つ返事で頷いた。

鎮守府を去る時には、ほぼ全ての部下が僕に失望し、見送りには一人を除き来なかった。

ただ一人、青い髪をした少女以外は。

少女は、意を決して言う。

「私は！提督に、付いていきます！」

ああ、来い。来てくれと。そう言いたかった。
だがダメだ。周りの全てがそれを許さないだろうし、何よりも僕自身が許せなかった。
僕はこれから、指揮も出来なくなった役立たずは、穀潰しのせめてもの役割として前線へと赴く。年を越すことも、無いだろう。
だから、そんな者に付いてくる必要は無い。
必要も、意味もないのだ。
少なくとも、前途ある彼女の生涯を台無しにする程の意義は無い。

首を横に振ると、泣きそうな顔を向ける。
そんな顔をしないでくれ、笑ってくれ。
僕は君の笑顔が好きなんだ。

思っただけのつもりが、言葉が漏れていたらしい。彼女はそれを聞くと、涙をぐしぐしと荒っぽく拭い、両の手で頬を押し上げて、無理矢理に笑顔を作った。

肩を並べて歩いたあの日。初期艦の君と、多くを右往左往したあの日々。それは最早、ここには無いのだ。

何か気の利いた言葉でも、教訓でも残したかった。しかし、何か言えば彼女の事が惜しくなってしまいそうで。自分の想いが揺らぎそうで。

だから、一言だけ。

どうしても、心から溢れて、言えずにはいられなかった一言だけを言った。

「ありがとう五月雨。…さよなら」

そのまま、去った。

涙が溢れないように空を見上げた。

忌々しいまでの快晴だ。

青い髪がいつまでも、心に残ったようだった。

後ろから、押し殺した嗚咽が聞こえる。

ああ、駄目だな僕は。

最後の最後に、君を泣かせてしまうなんて。

やっぱり、僕にヒーローの資格なんて無いみたいだ。

終わり

# 雪空に願ふ

「ふぅ、流石に寒いな…」

ここに一人、さる仕事を引き受けた男が居る。木枯らしが吹き荒び、雲が陽を翳らすこの寒気の中、それでも依頼を無下にせず行うお人好しだ。

ようやく作業が終わり、段差へとどっかり座り込む。胴体部分は運動によって暖まるが、末端部分はそうもいかない。

寒さですっかり赤くなった手を擦りあわせ暖めようとするが、徒労に終わる。

（まあもうここに居る必要もないし、

さっさと――――）

と、首筋にピタリと温かい物が触れた。

「うわっ！」

思ったより大きく出た声が静寂にこだまする。恥ずかしく思いながら後ろを向く。そこにはいたずらに、にやりと笑う少女がいた。

「はい、差し入れ。コーヒーでよかった？」

「…ああ、さんきゅ。

ったく、びっくりしたぞ」

「ふふ、ごめんごめん。つい、ね」

軽口を叩き、差し出された缶を手に取る。寒さでそれは既にぬるいものになっていたが、少し喉が渇いている今は寧ろ、それがありがたかった。

「提督は休憩中？
それとも、もう終わったのかな」

「ああ、ちょうど終わったとこさ、時雨。
…しかし、なんでまだここにいるんだ？先に帰ってるもんかと思ってたが」

純粋な疑問を、そのまま投げかける。
道すがら受けてしまったこの依頼に、他の者が帰るところまで見届けたのだが。
それに対し少女は、バツが悪げに頬を掻く。

「…えーっと。
一応、提督を待ってたつもり、だったんだけど」

「…悪い」

「ああいや！
僕が勝手に待ってただけだからさ、その…」

わたわたとそう言う時雨を他所目に、貰った珈琲をぐいと飲み干す。

「…よし、待たせてごめん。で、待ってくれてありがとな。一緒に帰ろう」

「あ…うん！」

---

「はーっ…しかし、冷え込むな」

「また、急に寒くなったよね。
…ん？手袋とかは持ってこなかったの？」

「ああ、あったんだけど…持って来たのが破れてな。かなり大きい穴が空いて」

「…それは、災難だったね。
あ、そうだ。僕の着ける？」

「いや、いいさ。
わざわざ外したら君が寒いだろうし、それに…」

提督は、女物の可愛らしい、サイズの合わない手袋を着けている自分を想像してみた。
苦い笑いがこみ上げる。何かの冗談か。

「…うーん、それじゃあ」

と、断ったのに少女はその手袋を外す。
そしてそれを背嚢に仕舞い込んでしまった。それから、言った。

「へへ、お揃い」

「…ぷっ、はは」

「あ、また馬鹿にして」

「違…ははは」

「もう！」

ムッとしたように一瞬そっぽを向く彼女。
しかして、その仕舞った手袋を着けなおそうとはしないままだ。
一方軍人は、ただ本当に嬉しくて笑ってしまったのだという事を、照れ臭さの狭間で言うか否かを迷っていた。

その時。
はらりと空から落ち物があった。

「…雪だ。」

どちらが言ったか。その一言を合図にしたように、独舞だった雪粒は、あっという間に空を覆い尽くした。

「わあ…！」

「…確かに寒かったもんな。
しかし、随分早い初雪だな」

時節はまだ１２月も序盤。ホワイトクリスマスにすら少し早いくらいだ。
だが、そんな些末事は、隣にあるこの笑顔を見ているとどうでもいいように思えた。
その視線に気付いてか。少し恥ずかしげに少女は言う。

「…子供っぽいって思った？」

「いやいや！
それは本当に思って無いぞ？」

「あはは、冗談だって」

後ろ手に手を組み、つい足を止めている提督の前で、時雨はそう、楽しげに笑う。

また、並んで歩き始める。
ゆっくりと雪が降りしきる中、ただ他愛のない会話だけが静寂に響く。
雪は容赦無く、大気の温度を奪う。それでも手袋を付けない彼女は、自らの手をはーっと、息で暖めてから、また後ろ手に組む。

その手に、無骨な大きい手が近づいた。
軍人の冷たい手が少女の冷たい手を包む。

「…それじゃ、俺こっちだから。またな」

「へっ？…あ、うん、また」

気がつけば、別れ道。
既に寮と執務室までの別れ道まで着いていた。
二人はその道を別れて歩く。

まるで幻想のようにも思えた一瞬。その実在は、この冷たい手に残る別の冷たさが証明してくれていた。

（……）

無言のままその手をもう一度息で暖める。
そして少し思案し、手を頬に当てた。

（ああ、やっぱり。
火照った顔に丁度いいや）

呆けたように歩きながら、そう考えた。

別の道の先。男は、後悔したように頭を掻き毟る。雪解けで濡れた頭が水しぶきをあげた。

「…嗚呼」

そう声を漏らしながら嫋やかなあの手の感触を、優しい冷たさを自分の手に思い出して、自嘲していた。

（二秒はねぇよ）

驚かれただろうか。びっくりさせただろうか。
もしそうなら、さっきのコーヒーの仕返しだ。陰湿な復讐だ！
そう、笑い飛ばすように思っても隠しきれない程に、様々な思いが頭をこだまする。
その中でも一番大きな気持ちを込めながら、一つ呟いた。

「…雪、積もるかな」

初恋は、雪のように溶けて失せるのが道理だと何処かで聞いた。

儚いからこそ雪なのだと。
儚いからこそ恋なのだと。
故にこの二つは消えるのだと。
しかし、長々と溶けない氷もある。
しかし、季節外れの雪だってある。
ならば溶けぬ雪だっていいじゃないか。
儚くなくともいいじゃないか。

春はうららかだろうか。
夏はまた酷暑だろうか。
秋は紅葉を見せるだろうか。
そしてまた巡り来る冬は。
また、雪を見せてくれるだろうか。

全てそうでなくても構わない。
君が居る季節は。君が居るだけでそれは、こんなにも鮮やかだから。

（だから願わくば、
この先も一緒に居られますように）

誰かがきっと、雪空にそう願った。

おわり

# 服の透ける眼鏡

「…何だ、こりゃ？」

ぽつんと。机の上にそれは置いてあった。

一見それは普通のメガネ。

が、問題は横に置いてあるメモ書きだ。

書いてある文字はそれだけ。

ただ、それだけなのが厄介だ。

（…服が透ける、ねぇ…）

こういったトンチキなモノを作るのは大体明石だ。次点で夕張。

最初に浮かんだ感情は「本当だろうか？」といった猜疑心。

そしてそれは次第に薄れ、むらむらと他の感情が湧き上がる。好奇心と言わずもがなな感情がむらむらと。

（……）

明石か夕張、どちらもをとっちめればこの眼鏡についての真相は聞けるだろう。

だがそうしたらこれを掛ける事も恐らくできなくなってしまう…

「……よし」

ほんの少しの逡巡の後、コソ泥のように周りを見渡しながら提督はそれを付けた。
度は付いていない。一見するだけならただの伊達眼鏡にしか見えないような代物だ。
（…これは確認。確認の為だからセーフ）
咎める自分の良心を、そんな大義名分をつけ、無理矢理納得させて。
確認ならその状態で自分の服を見れば良いのでは？という考えはもう彼の頭には無かった。
そんなこんなで彼の頭が冷静になる前に、その部屋に一人来客が来た。コンコンコンとノックの音。恐らくは本日の秘書艦。
「は、入ってくれ」
と合図をすると気の抜けた返事とともにドアが開く。そこに居たのは…
「ありゃ、北上？」
「うーっす。なんか目覚めちゃってさ。
暇だから来ちゃった」
と秘書艦では無い。ただ、気まぐれに遊びに来ただけの、気まぐれな娘だった。
そして提督の眼鏡を通して見えた彼女の格好は…
…ベージュのスポーツ・ブラとパンツだった。

（……下着までかよ!!）

すっかり大義名分を忘れきり助平心を丸出しにしていた提督は、心の中で声にならない慟哭をあげ、歯噛みをする。

だが彼はそんな事はおくびにも出さず平静を保ち、あくまで紳士的だった。

「そうか。まあ気が済むまで居るといい。
どうせ俺もまだ休憩中だ」

「ん、ありがとね…その眼鏡どしたの？」

「イメチェンさ。悪くないだろ？」

「私は付けてない方が良いかなぁ」

聞いているだけならば普通の会話である。
微笑ましいコミュニケーションだ。

がしかし、提督はだんだんと気が気で無くなっていた。会話より気になってるものがあった為だ。しかもそれは時間と共に加速度的に彼の気を引いていく。
それは、彼の目に移る甘美な光景。
椅子に座った彼女が両手を上げ、頭の後ろに置く。その動作は、彼女の下着をほんの少しずれさせる。そしてそのズレは少しずつ蓄積し…

（…もうちょい、もうちょっと）

…最早、大義名分など無い。彼は心の中ですら獣性を誤魔化しきれ

ていなかった。彼の心は既に、野獣と化していた。
…健全な男なら仕方ないのかもしれない。

…そうしていると。ふと北上が椅子から立ち上がった。
そして提督の近くに来たかと思うと、
耳元でこう囁いた。

「バレバレだよ。…し、せ、ん」

そう言って、するりと提督の耳に掛かっていた眼鏡を取った。
決して早い動きではない…
むしろ緩慢な動きだったが、直前に囁かれた言葉にぎくりと固まっていた提督はそれに反応出来なかった。

そして、そのまま彼女は眼鏡を自分にかける。
北上は少しだけ、見えた世界に驚いたような顔をした後、にやにやと顔を歪め提督の顔をこちらに向けさせる。

にやにやとした顔をそのままに、北上はこれでもかと挑発的な態度を見せる。

「提督ったらスケベだなぁ」

「何を期待してたのかなー？」

「何も言わないでそんな事するなんてダメだよ」

と。

さて提督はと言うと。すっかり頭も冷え（顔が真っ青になるほど！）、自己嫌悪やら恥ずかしさやらで情けなくなってしまい、そのまま言い返す言葉もなく縮こまってしまっていた。

「ねえ、どーなの？」

「いや、その…」

曖昧な返事を繰り返す提督に、北上はするりと接近する。そして、耳元でこう囁く。

「黙ってたらわかんないでしょ？

…それとも何かな」

そこまで言うと彼女は再び距離を取って、彼の目の前に立つ。そして笑みを浮かべて…

「この下がそんなに見たいのかな。

…それとも、見たいのは更にその『下』？」

スカートをひらつかせながらそう言った。そこに妖艶さは無い。悪戯な笑みを浮かべるのみだ。

「…そ、それは…」

「…ぶぶー。残念、時間切れだよ」

そう出し抜けに言うと、彼女は眼鏡を外す。

そしてほいっと、乱雑に提督へと投げ返した。

「それ、他の娘の前では外しなよ？

…私以外はきっと、怒っちゃうからね」

「…お、おい、それってどういう…

…ッ!?」

「…ふう、そんじゃね。」

目を白黒させている提督を尻目に、彼女は執務室を出ていってしまった。

…去り際の、唇への熱い口付けだけを残して。

部屋に残ったのは、魂を抜かれたかのように茫然としている提督ただ一人。その耳に足音が一つ聞こえてくる。今度こそ秘書艦だろう。

放心した彼が考えているのは眼鏡の事でも誰がこれを作ったかという事でも無く、北上の事。

彼女がスカートをひらつかせた時の、悪戯な笑み。あの、にたっとした笑み。

（今度また会った時、何て言おうか）

…心の底では分かっていた。あの笑みを浮かべた彼女にはきっと、もう敵う事は無い。

あの笑みの北上には最早服従するしかない。

服従し、彼女の愛を乞うしかないのだ。

近づいてくる足音。

目を閉じ、天井を仰ぎながらそれを聞く。

閉じた目の裏には、数瞬前に見たベージュと唇の桃色が鮮烈に残っていた。

終わり

メルト・ダウン

「以上で、報告は終わりよ！」

「おう、お疲れさん。
それじゃ、４人とも後は自由にしてくれ」

「はい、なのです」

バタンと、小さな音を立ててドアが閉じる。
だが微かに。そこには人の気配が残っている。

「…」

「ん、どうしたヴェールヌイ。
何か用か？」

「ああすまない。用事という程のものでは無いんだ。ただ少し…その、いいかな？」

「…あぁ分かった。
…おいで、響」

「うん」

そう返事をしたヴェールヌイは俺の方へ来て、そして、いつものように膝に座り向き合う形で俺を抱きしめた。
俺はそれに対し、できるだけ何も無かったかのように。ただ普通に仕事に励む。
…偶に手を空け撫でたりする事を忘れずに。

「…」

何か反応するでなく、抱きつく力を少しだけ強めるヴェールヌイ。その白い肌、顔は赤くなっている。

彼女がこれをするようになったのは、『響』が『ヴェールヌイ』と成った、その数週間後の事。

ある日、彼女は自室に戻っていた俺元へと来て、何を言うでもなくただ俺を抱きしめたのだ。

勿論俺も最初は困惑したし、咄嗟に引き剥がそうとしたのだが…

…あの時の表情は忘れられそうにない。

上司であり、且つ実年齢も見た目年齢もかなり離れているとはいえ異性に抱きつくという行為への羞恥。

そして、それを上回る程の恐怖、苦しみ、不安などの負の感情が発露したあの顔を。

そんな顔を見てしまっては無下に引き離す事など出来る筈もなく。が、無遠慮に事情を聞き出す事も出来ずに、ただ無言で抱きしめ返した。

その日からだ。

時たま彼女が、こういった時間を俺に求めてくるようになったのは。

ペースは大まかに、2週間程に一度。

ただ、一ヶ月位空けて来る時もあれば、3日に数度の時もあるので、かなりまちまちではある。

「…あれ、朱肉が無い」

「これかい？」

「それだ。ありがとう、響」

「……うん」

今の朱肉が失くなったというのは、嘘だ。
こんな嘘をついた訳は、彼女はこれを行なっている最中、俺の役に立つ事が。
そして、『ヴェールヌイ』ではなく『響』と呼ばれる事がいたく気に入っているらしい事が分かっているからだ。

それに気づいたのはそんなに前ではない。
寧ろかなり最近の事だった。
顔が見えている時は明らかに顔を綻ばせ。見えない時でも、抱きつく力を強める。
そんな事が何度も起こったのなら、如何に鈍くともそれが解るだろう。

そして俺が、響がその喜ぶ事を知った時。
その時、何故彼女が。響が、この時間を求めているのかも分かったような気した。

彼女は、怖かったのだ。

響からヴェールヌイへと換装され、ヴェールヌイとなった自分自身により、『響』が消えて無くなってしまう事を。
これまでの自分という全てが消える事を。
自らの遺した過去が総て無くなる事を。
そして、それで『響』が永遠に忘れ去られ、
二度と思い出されなくなる事を。

「なあ響」

「何だい？」

「……

…あー、何を聞こうとしてたか忘れた」

「…何だいそれ」

そう呆れながら、楽しそうにフフッと笑う。
その顔には不安や恐怖は無い。
最初にこれを求めて来た時や、それから始まる数回に渡ってあった負の感情は既に無かった。

多分、彼女はその恐怖や葛藤を、この今迄のこの行動だったり、自分自身での逡巡により何とか克服したのだろう。

だが、俺はそれをわざわざ指摘しはしない。
彼女がその恐怖を克服していようと、彼女が俺に対してそれを求めているのならば、それに応えるべきであるからという事だ。

…それに。

「なあ響」

「今度はなん…うわっ」

「お前は可愛いな」

「…急に、何を言ってるんだ」

「本音だよ。別に今更、隠す必要も無いからな」

「…そうかい」

それに、俺自身もこの時間に対し、不思議な安らぎを。そして、響本人に対してある種の愛情を覚えているのだ。

強引に頭を撫でられながらも、ヴェールヌイは顔を必死に俺から背ける。

残念ながら耳まで赤いその様子は、顔をそらした程度では隠し通せてはいなかった。

彼女もそれは承知していたようで、途中からはその夕暮れのように赤い顔を隠す事をやめた。

「…ねえ、司令官。

もう一度、私を呼んでくれないか？」

ふと顔を上げ、彼女が言う。

その赤みを帯びた顔は、何処か妖艶だった。

「…響。」

「…もう一度だけ」

「響」

「…うん、ありがとう」

それだけ言うと再び顔をそらした。

…そして、意を決したように顔を上げた。

「ねぇ、司令官…！」

その時、部屋にノック音が響く。

恐らくは、事務関係の仕事を補佐してくれている大淀のノックだろう。

そしてそのノックはこの時間の終わりを意味していた。

というのも、初めての頃からか、はたまたいつの間にか暗黙の了解として二人に身についていたのか。この時間はあくまで二人きりの時のみに行われる事になっている為だ。

『すいません、今宜しいでしょうか？』

「…少しだけ待ってくれ」

そうしている内に、響は既に膝から降り、ほんの少し乱れた衣類を正している。

「よし、どうぞ」

「失礼します…あら、響ちゃん？

ごめんなさい、何か御用だったかしら？」

「いいや、大した用でも無かったから。

…それじゃ、司令官。」

「ああ、またな、『ヴェールヌイ』」

そうして彼女は部屋を出ていった。

恐らく、彼女との密談はこれ以降も続いていくのだろう。実際、俺

自身、これがいつ迄続くかも分かっていないのだ。
少なくとも、彼女が先ほど言いそびれたような事を言う迄は。
…もしくは。

「…どうか為されたのですか？」

「いや…何もないさ。…何もな」

…俺が再び渡し損ねた、この小さな箱の中の指輪を渡すまでは続いてしまうのだろう。

彼女と俺はどちらもこの密談を続けていたいが、同時に、二人ともこの密談を終わらせたがっているのだ。

全くもって皮肉な事である。

俺は、赤みと熱を帯びた顔を大淀に悟られないようにしながら、ただそう思った。

終わり

# この想いを言葉にするのなら

はあ、と。息が白い。
ポケットに入れた手をふと動かしてみる。
くぐもった体温で温まっていた手はしかし、それでもかじかむ。
だが寒さにかじかむ手とは裏腹に、その軍人の
脚は揚々と、ある場所に向かう。
ほんの少し熱を帯びる顔の古火傷をざらりと掻き、提督はただ向かう。
着いた場所は寂れた公園。
三ヶ日という事もあり、人っ子一人居ない。
一つだけ、人影を除いて。
自分も待ち合わせより結構早めに来たんだが。誰に言い訳するでもなく言った。それに反応してその人影はひょこりと動き、近づく。

「こんにちは。
…あけましておめでとう！」

そういってその少女はわざとらしく丁寧に、頭をぺこりと下げる。
格好はもこもこと暖かさに比重を置いた服装に見えた。それでも鼻が赤らんでいる。随分と待たせてしまったのかもしれない。

「…どれくらい先に来たんだ？」

「え。ぼ、僕も来たばっかりだよ」

ぎくりと、音が聞こえるように。
気まずそうにそう答える。

「時雨は、本当に嘘をつくのが下手だな。はは」
「で、でも。そんなに待ってないよ？本当だって！」
まるで責められたようにあたふたと応対する少女を見てつい、にやつく。
「さ、行くか。
ここでずっと居るのもくたびれるだろ」
「…うん。そだね」
二人は並んで歩き出す。
今日は三ヶ日。
今日は、二人で初詣に行くのだ。

---

やっぱりと言うべきか、酷い混雑だった。
でもまあ、想定の範囲内だったと思う。
どうやってもこの時期は混むだろうし、それを覚悟でここに来たんだから。
「はぐれないように、ね？」
そう言って手を出して、握りあう。
僕は何というか…よく出来たなぁ、なんて思ったし、精一杯の強がりだった事を感づかれてしまわないか、ちょっと不安だった。
それについて、気づかれちゃったかはまあ分からないけど。

ともかくとして手を繋いで。お賽銭を入れて、手を離して、礼をして、また、繋いで。
少しだけ歩いた。ちょっとだけでも混雑がゆるいところに出ようと。

「本当はくじでもと思ったが…
すごい列だな。どうする？」

「まあ一年に一度の事だし。
折角だから並ぼうか」

「…そうだな。まあ、こういう時間もいいか」

「あ、ちょっと待ってて。並んでていいから」

そう言って、また少し手を離し、
ある方向へ歩く。

「？大丈夫か。
迷うかもしれないし、ついて行こうか？」

「ううん、大丈夫。
離れてても、提督の場所はわかるから」

「え？……ああ、背丈って事か」

「ふふ、そういう事！」

つい綻ぶ顔を、まあ、君にならいいかなんて思って、そのままにそう言う。
君の顔が赤いのは寒いからか、それとも少しは僕に魅力を感じてく

れたからかな。二つ目だったら、嬉しいかも。

---

「お待たせ！」

そう言って、思ったより早くに時雨は戻って来た。その両手に、一つづつ紙コップがある。

その独特の匂いと色を見て、それが何かを分かる。成る程、甘酒か。何処かで配られていたのを見かけて、持ってきてくれたのか。

「おお、さんきゅ。

身体も冷えてたし、丁度いいな」

ほんのちょっぴり、誇らしげにする時雨の頭をつい癖で、撫でる。嬉しそうに、目を細めてはにかんでいる所を見ると、こっちまで変に口角が上がる。

「そういや甘酒って、大丈夫か？

ほら、酒弱いだろ」

「あはは、確かに凄く弱いけど、これくらいなら平気だって。心配性なんだから」

そう、からからと笑われる。

一度、酔った彼女に心臓に悪い真似をされたからか、つい敏感になってしまう。だがあの乱れ様を見たら誰だってこうも過保護になる筈だ。

「…まあ、ならいいんだが」

釈然としないまま、一つのコップを受け取る。
一つ、手が空いた。

……

…その手を、取った。
びくりと驚いたように動いたが、そのまま握る。一瞬、二人とも黙り込む。

「…えっと。
多分もう、はぐれないと思うんだけどな」

「…俺がしたいからやってる。
もし嫌なら言ってくれ」

「それ、ずるいよ」

握り返す力と、熱さを感じる。気を紛らわすように、コップを呷る。
つい勢いよく飲みすぎて、火傷しかけた。

---

「そう言えば、時雨はどんな願い事したんだ」

色々な要因で火照った顔を、ちょっと落ち着けようとしてる時、ふと提督が質問する。

「んー、秘密。
言ったら叶わないって言うでしょ？」

「ふむ、確かに言うな。
…でも一人くらいになら、平気かもしれん…」

「無いよ、そんなルール。
残念だけど諦めてください」

しーっと、指を口の前に置いて言う。
やってからちょっと恥ずかしくなって、誤魔化す為に甘酒を口にする。あちち、火傷した。

「そういう古賀くんは、何を願ったの？」

「…じゃあ俺も秘密だな。
もしもそれのせいで叶わなかったら困る」

「あはは、よっぽど叶えたいんだね」

「ん…まあ、な。
そういう貴様はどうなんだ」

「え…うーん、叶えたいけど。
今でも半分叶ってるみたいなものだから」

「？」

僕の願いは一つ。
誰かさんと、出来れば一緒に居られるように。
きっとそれは、ずっとは敵わない願いだ。
彼の性分からして、いつかきっと何処かへ行ってしまうと思うし、きっといつか……

…それでも、僕なんかには勿体ないくらいに、
今は君がいる。今は、それが嬉しい。
こんな事、面と向かって言えるはずもない。
それこそ願いが反故になる事が怖いし何より、
恥ずかしすぎるもの！

だから、お茶を濁す。こう言って。

「お互いに、叶うといいね」

---

さて、ようやく長い列が目の前から無くなって俺たちの番が来た。
いよいよ日も落ち、冷え込んで来たので、ありがたい。
ガラガラと取って、せーので開ける。
さあ、どうだ。

「「げ」」

意図せず被った声に、つい横を向く。
きっと同じように横を向いたんだろう、時雨と目が合った。別に合図をしたわけでもなく、手のひらの紙を見せ合う。
どちらも、凶だ。

「…く、くく」
「ぷっ、はは」

目を細めて、二人してつい笑う。
せめて片方が良い結果なら、片方を笑い物にする事もできただろうに。いや、結果笑えているならいいか。
それに、この結果が俺たちらしいのかもしれない。

凶の中に、それでも幸せを見つけて、それでも笑顔でいられている俺には、ちょうど良い。

「…『待ち人来たらず』だってさ。
あはは、幸運かもね」

「？」

「あ、ほら…だって。もう、いるじゃない。
だから、新しい待ち人が来ないって事は、一緒に居られるって事かな、なんてさ」

「…なるほど。そういうのもアリか」

「あ、馬鹿にした？」

「いやいや、これは本気で感心してるんだ」

そうだ、間違いなく本心。
何が吉で何が凶か。それを決めるのはきっと自分なんだろう。彼女はいつも、大切な事に気づかせてくれる。

ならば過ぎた一年の締めくくりと新しい一年のスタートを兼ね、自分が幸せか。考えてみようか。
目の前の、おみくじを見てころころと表情を変える少女を見て思う。

俺は今、幸せだ。

---

帰路に着く二人。
とうに日は落ち、光源は外灯と星灯だけだ。
先程までは同じく帰路に着く参拝者が周りを喧騒に埋めていたが、今は見渡す限りには二人しか居ない。互いの帰るべき場が近くなるにつれ、少しずつ二人の会話は少なくなる。
名残惜しむ、この時間の楽しさを殊更に味わうように。想いの氾濫を受け止めるように。

「ねえ、今日楽しかったね」
「ああ、本当に」

そう、少ない言葉を交わして。

「なあ、時雨よ」

「うん？」

「好きだ」

「僕も。…好きだよ」

そうだ。
この気持ちを言葉にするなら、これしかない。

掛け替えない、では伝えきれなくて。
愛している、でもまだ足りなくて。
そも、言葉にしてしまえば陳腐になりそうで。
だから、表せるのはこの一言だけだろう。
この一言で、足りてしまうのだろう。

「それじゃあ、またな」

「…うん、またね」

一年が終わり、また始まる。
めくるめく過ぎ去る時間をただ、君という煌めきに気づけたそれにただ、幸せを感じる。

すーっと、息を吸った。

おわり

# 嘘でも良い

貴方はずっと、嘘が下手だった。
嘘をつくや否や。
すぐに目が泳いで、声が大きくなって、吃る。
でも、そういう真面目すぎるところが私は好きだった。
…そうね。私は、加賀は。貴方を愛している。いつからか、私の感情は貴方に向けられるようになっていた。
貴方の指揮に、人間性に、優しさに。どれかはわからないし、そのどれもかもしれない。貴方を好きになっていた。

だから提督。貴方に指輪を渡されて、私本当に嬉しかったわ。表現の少ない、つまらない女かと思ったかもしれないけど、心の底では跳ね回っていたのよ。
跳ね回って、浮かれて、私が私じゃないみたいだった。貴方の為なら何でも出来ると思った。その気持ちは嘘じゃないと、今でも言える。
でも、気持ちや感情だけで何かを成し遂げられるならきっとこの戦争は終わっていて。
多分、気持ちの浮つきは戦いの邪魔にしかならなかったのだ。

運が悪かっただけだと、皆言う。
貴方も、赤城さんも、五航戦の子も。
私だけが。私を赦せていない。

あの日、あの時。
あり得ないような奇襲を許してしまったのはきっとそんな私の、緩みのせい。
張り詰めた弓の弦が、心の糸が緩んでしまっていたから。

だから、かつてないほどの乱戦になった。
不倶戴天の敵である、深海からの使者との、血みどろの戦い。
それは、巻き込ませてはならない人を、貴方を巻き込む程に戦火を広げてしまった。
だから、貴方は大怪我を負った。
左腕を丸ごと喪う程の。

「なあなあ、見ろよこれ！
かっこよくねぇか！」

喪った腕の代わりにつけた装身具を、そう皆に笑いながら見せびらかす貴方は、まるで何も気にしていないようで。
顔にまで巻かれた、痛々しい包帯の印象まで払拭するくらい、あくまで明るく振る舞っていた。
彼が入院し、どこか仄暗いものがあった鎮守府の空気を、いとも容易く明るくしてくれた。彼は、帰ってきたのだ。

「いやぁ、この義手のお陰で、ちびっ子共からも大人気よ。折角なら大砲でも仕込んでくれりゃあ良かったのにな」

医療用の眼帯がようやく取れる頃、彼は私にそう言った。
ただ、その声は。私と二人の時だったからか。それとも私の思い込みか。どこか、辛そうに聞こえた。

息が詰まった。
意味のない、謝罪が喉から溢れた。
無駄な謝罪はするつもりがなかった。
すれば、彼は必ず笑って赦してくれる。
赦される事すら、私にとって赦せなかった。彼に赦される事は、赦されない。
そう思っていたのに。脳が青ざめ、口から懺悔がこぼれ落ちる。

「大丈夫、大丈夫だって。
だから、な？泣くなよ」

ああやっぱり、貴方は笑うのね。
哀しそうに。でも、笑ってくれる。

心が、脳に服従しない。いつだって冷徹に自分の事などコントロール出来た筈なのに、出来るようにしていたのに。
一番の被害者である彼に、加害者である私を赦させるなんて、させてはならなかったのに…

その時が、決定的な境目だったと思う。
私は彼の嘘がわからなくなった。
提督自身が心を偽る事が上手くなったのか、私が彼に、向き合えなくなったのか。
どちらもかもしれない。
彼が、笑う。
私が、それを聞く。
いつも通りが帰ってきてと、私の脳髄が不安感に屈する。雁字搦めのままになる。
でもそれでも、もう良いとも思っていた。
彼がまた笑い、それを見て周りが笑う。
それに変わりは無い。
その幸せな空間に代わりは、無いのだから。
身勝手で、最低でも。この罪の意識も時が風化させてくれるならそれでいいと。
自己嫌悪に苛まれながらも思った。

ある夜。
夜中に目が覚めた。

横を見ると、其処に居る筈の提督が居なかった。就寝している筈の彼が。
枕元には、義手が置いたままに。
最悪の場合が頭に浮かんで浮かんで、血の気が引く。弓だけを手に取り、部屋を走り去る。
もし、このまま彼が居なくなってしまったなら。考えることすらしたくなかった。

心配をよそに、少し探した先に彼は居た。
月光が照らす海の近く。潮が満ちた砂浜に一人立ち尽くしていた。
入水か？と、頭によぎる。
違う、違う筈だと自らに言い聞かせ、でも声をすぐにかける勇気すら出なくて、ただ遠くで見つめる。
私の事には気付かなかった。
代わりに今は無い左腕のその幻影を追うように、虚空を右手で掻いた。
月明かりが照らす、傷に塗れた貴方の顔。
その頬に一滴が垂れた気がして。

私は、提督の近くに行った。
思いやりや、優しさよりも、居た堪れなさに耐えられなくなっての行動。

（嗚呼、私はつくづく）

足音に、彼が私の、加賀の存在に気付く。

「…こんな所に、いたのね。
心配してしまったわ」

「悪い。ちと、夜風にな」

そう言う、彼の顔を見た。

薄暗い月明かりの下でならば、貴方の顔を真面に見る事が出来た。

…しまったと、言うような。君に見せてしまうつもりはなかったと言いたげな、気まずげな顔。あの事件以降、見たことも無かった顔だった。

唇を噛む。何も言えはしなかった。

何を言って、肯定されても、否定をされてもきっと私は耐えられなかった。

貴方が、その弱みを見せたくなかったのは何故？申し訳なさ、遠慮、優しさ？

それとも、恨み？

じくじくと、腐食のように心が膿んでいく。

その、言わないつもりであった感情が、何から来ているものなの。

その想いは、何なの。

嘘でもいい。

一言、行って欲しい。

嘘もつけない、貴方の真面目さが好きだった。筈なのに、私は。

それなのに、私は！

（…嘘でもいい、愛だと言って）

おわり

朝潮は尋ぬ

「司令官、セックスとはなんでしょうか？」

二人しか居ない部屋の雰囲気が凍りついた。
そう、感じた。

「……」

「司令官、セックスとは」

「二度も言わなくても良い。
大丈夫、聞こえてるから」
（…聞かなかった事にしたいけど）

脂汗が滲み、呼吸が荒れる。
ここから先は少しの会話のミスも許されない。

緊張しつつ口を開く。

「何故、急に…そんな質問を？」

「いえ。以前、隼鷹さんから男女で行う事だと教えて貰ったのですが、詳細が分からなくて。司令官なら知っていらっしゃるかと…」

（…5。いや、半年は禁酒だな、あいつ）
「…ああ、知ってるさ。知ってるとも」

「!!そうですか！

では、是非ともご教示して頂きたいのですが！」

「……」

この時、提督の頬には汗がつたい、神経は蒼白となって震え、己の細胞が次々に死滅してゆくかのような嘔吐感に包まれた。ぞくつくような絶望と、純真無垢たる期待の目つきだけがただその口を開かせる。

「ああ…いいだろう…
いいか、セックスというのはだな…」

このような純潔無垢を汚して良いのか？
否、否である。
しかし、いつか彼女も知る時が来るのでは？
それならば、今教えても変わらないのでは？
否。現在のこの純真は決して穢してはならぬ。
だが、自らの信条として、嘘は吐きたくない。
それを彼女らにしてしまうのは、信頼への裏切りな気がしている。

僅か二秒なれど、数えきれぬ程の逡巡の後。

「…英語で『性別』を表す語句だ」

彼はあくまで嘘はつかず、なんとかこの場を収めようとした。

「成る程…
…？しかし、隼鷹さんは行動であると言っていましたが」

おのれ隼鷹。

「…そうだな。ところで朝潮。どうやって子供が産まれるのか。それを知ってはいるか？」

「…？ど、どうしたのですか？」

「いや、急に話題を変えてしまい済まない。
そうだな、人間でなくともいい。動物でもなんでも、どうやって産まれるか知っているか？」

少女からすれば、急激なる舵切りであるように思われるだろう転換。しかしそれは、彼にとっては地続きであり、限りなく近い暗闇なのだ。
朝潮はそれにほんの少し困惑した素振りを見せたがしかし、その忠誠心たるや。直ぐにその質問に答えることを優先した。

「は、はい！知っています！
コウノトリが運んで来る、と！」

嗚呼。
提督は天井を仰いだ。
もし　動物の『交尾』を知るならば。
『その単語』は、その意味を含むのだと。
出来るだけ遠回しに遠回しに。
可能な限り純潔を穢す事なく終わることが出来ると考えていた。

だが、駄目だ。
駄目だった。もう何もかも台無しだ。
何もかもが、地獄の巷だ。

（いっそ誰か殺してくれ）

今迄の人生にて一度たりとも感じなかった自死の衝動すら堪え、逡巡を続かせる。思考を休めるな、脳髄を廻せ。
悩んだ先に、その脳が出した結論は。

「…あまり大きな声では言えないがな。
実はこの言葉には『秘め事』を示す用法がある」

「ひ、秘め事？それは、まさか…」

「ああ。
…キスの事だ」

彼は嘘を吐いた。
彼は、信条も誇りもかなぐり捨て、嘘を吐いたのだった。
それは果たして本当に彼女らの為か。
保身か、エゴか。それでも、言えなかった。

（言えてたまるかチクショウ…！）

唇が傷だらけになっている事に気づく。噛み締めすぎた。

「そ、そうなのですか…！」

キスと聞くのみで顔を赤らめ、そして恥を感じる。
そんな可愛らしさを、状況が状況ならば最大限愛でていただろう。
だが、今はそんな気になれなかった。

「ああ。だからそんなに大声で言ってはいけない言葉なんだ。
あまり、公の場で声に出してはいけない」

「そ、そうなのですね…私はとても恥ずかしい事を…」

「なに、知らない事は誰だってある。今回は偶々それが恥ずかしい事だっただけさ」

「そう言って頂けると、有難いです…」

「ああ。…もう、大丈夫か？」

「はい！ありがとうございました！」

びしりと敬礼をする朝潮。

そんな彼女を見て、提督は漸く安堵の溜息をつく。

話をしている時間は数分に過ぎなかったが、この数分で提督の黒髪は　灰色に変貌していた。

…ふと。ある事に提督は気づく。

朝潮がもじもじとし、部屋を出ていかないのだ。

提督が不審に思っていると、少女は、吃りつつも話し始めた。

「以前荒潮に聞いた話だと、国外では親しい者は気軽に…キ、キスを！すると聞きました！」

「その…で、ですから…その文化に則って…

その…キスをして頂けませんか？」

（……!?）

こんな状況でないなら。提督は健気に想いを寄せてくれている娘に対して、『それ位ならば』と応えただろう。

だが、この時は。この、極端に少女が穢れる事を恐れた、この状態

の提督は。咄嗟に拒否をした。駄目だ、と。

少女はあたふたとその拒否へと反応をする。

「い、一度だけでいいんです！一度で良いので…」

ガチャ

「失礼します提督、書類に不備が」

「…私と『セックス』しましょう！」

「……」

「……」

『詰み』である。

「…ええ、はい、憲兵さんですか？
はい、少し。…ええ、お願いします」

「……」

先ほど部屋に入ってきた大淀が、それきり内線を切り、此方を見る。
それは、笑顔だった。悍しい、悍しい。

「何か言い遺す言葉は？」

「それでも僕はやってない」

終わり

## 朝潮は冀う

「司令官、抱いて頂けませんか？」

一瞬、ぞくりとした。

だがふと思い直し、平静を保つ。

朝潮は抱きしめて欲しいと言ったのだ。

そこにきっと他意はない。そう思って。

「あ、ああ。いいぞ。

どうしたんだ？急に甘えてきて」

その動揺を言動に漏らしながら、提督は席を立つ。そして視線を少女に合わしゆっくりと話しかけた。

「いや、別に言わなくてもいい。

ただ甘えたくなっただけなんだよな」

彼は自分にも言い聞かせるようにそう言い、少女を軽く抱きしめた。父親が娘を愛でるようにしてゆっくりと。包み込むようにそれでいて力強く。

（そうだ。俺の心が穢れていただけだ。抱擁で顔を赤くし　それでも笑顔になってくれているこの子が、そういう意味で言う訳がないだろう）

そう、考えながら。

すっかり安心してから抱擁を解き　彼は朝潮を見据える。

彼女の頬は桃色に染まっていた。
…が、その表情は少しだけ困った様だ。
それは提督をひどく不安な気分にさせる。
背中に氷が溶け入る感覚を感じる程に。
どうしてそのような？問いは出ない。口が動こうとしない。
鼓動が速まり。
脂汗が滲み出る自らの額を感じながら朝潮の言葉を待つ。

待つ時間は永遠に思われたが、実時間はきっと、とても短いものだっただろう。
しばらくして朝潮はおずおずと口を開ける。

「ほ…抱擁の方、ありがとうございます！
その、とても嬉しい…です。ただ…」

…『ただ』？

「その…司令官に抱いてほしいというのは女として、という意味でして！」

卒倒しかけた。
というか本気で視界がグルッと逝った。

「!?ど、どうしたのですか!?大丈夫ですか？」

「大丈夫。大丈夫…だ」

失いかけた意識を、口腔が血を滲ませる程に強く噛み締める事でなんとか保つ。ここで倒れるのは簡単だ。

だが、まだ倒れるには義務が残っている。
どうしてこんな事になったのかを、聴く義務が。

「…何処…から、そんな情報を?…隼鷹か?」

否。違うはずだ。彼女には前歴がある。そしてその際の刑罰（禁酒）は彼女の反省を促すに十分が過ぎる筈。

（刑を言い渡された時目やら表情やら死んでいたし。アレで二度目をやるとは思えねぇしな）

では一体誰が?
彼には目星がつかない。
誰も黒星（クロ）の候補が見当たらないのだ。

その疑問は少女の一言で払われた。
払われる事が幸せとは限らないが。

「い、いえ。今度は隼鷹さんでは無く…
榛名さんにお聞きしました」

断末魔の悲鳴を上げかけた。
何故、どうして、嘘だ。
そんな文言のみが脳髄を駆け巡る。

「…は……榛名…が…!?」

何とか、一言を放つ。
本能か、目尻にはよくわからない水が溜まる。

「はい。金剛さんと話をしていらっしゃった所を…その、図らずも盗み聞きしてしまいまして」

と、自らの無作法を恥じ入るようにして話す。
生真面目だなと思い　少し和む。
精神の限界をほんの少し遠ざける事が出来た。

「ええと…少し興味深い内容でしたので。そのまま聞いていると、『抱かれたい』などの言葉が出てきたのですが」

「…成る程。朝潮の知っている意味では会話が成り立たないと思って、その意味を聞いたんだな？」

「！は、はい！その通りです！」

「…成る程、成る程な」

…ほんの少しだけ、提督の目に光が戻った。
まだ、行ける。

「……ひょっとして。その、意味を質問した時。
榛名は慌てていなかったか？」

「！何故それを？」

良し。心の中で拳を握る。

思うに、事故に近かったのだろう。
金剛と榛名が少しだけ、姉妹故に許されるような明け透けに恋バナをしている最中の事。朝潮がそれを聞いた。
そして痴的…否、知的好奇心から朝潮はその会話について聞いたのだ。
聞かれた以上、すっとぼける事も出来ない。

ならば彼女は答えるしかなかった筈。

…これで榛名への疑惑は晴れた。

だがもう一つ。どうしても明らかにしなければならない事がある。

息が急に荒くなる。

一気に数十年も老け込むような錯覚に陥る。

指先がチリチリする。口の中はカラカラだ。目の奥が熱い。

それでも、問わねば。

「…それで。質問された榛名は何と答えたのだ」

「…は、はい。『抱かれる』とは…」

「…は、はだ、裸で同衾する事だと！」

…どっと、安堵のため息が出た。

嗚呼、助かった。

朝潮は穢れてなどいなかったのだ。

少女を穢してしまった悲しい事故は無かった。

おお、裸と言うだけで顔を茜色に染め上げるその純真さよ。

恥のあまり目をぎゅっと瞑る姿の保護欲が湧く事これ以上無い。

「…そうかそうか。そういう経緯だったか」

すっかり気を抜き提督は言う。

その顔は老け込み、口腔は噛み締める余りに血塗れだ。

「…はい。それで、どうでしょうか」

俯きながら、彼女はそう返す。

「ん？何が？」

極度の緊張から逃れ、半分呆けつつ返事をする。
それが最悪の事態を招くとも知らずに。

「…私を抱いて頂けますか？」

「ああ、お安い御よ…え？」

…そう。何も解決していなかった。
根本的な問題は全て残っていた。
彼が解決した気になっていたのは、いわばその問題の前座である事。それをすっかり忘れきってしまっていたのだ。

「!!よ、宜しいのですか！ではっ！」

提督のその生返事を受けて、彼女はその顔を更に、石榴のように赤くしつつ敬礼をする。
…そして、その上着を脱ぎ始めた！

「〜〜ッ!!や、やめろ朝潮！」

提督は顔面を蒼白にして、その脱衣を止める。
言葉と、その両の腕で少女の服を抑えて。

ガチャ

「あの、先程からかなり物音がしていますが何かありまし…」

「は、放してください！」
「いいからその手を離せ！コラッ、抵抗するな！」

「……」

はっと。提督は自分に向けられる殺意を感じて、
そっちを迎え見る。

そこには、いつも彼の仕事の補佐をしてくれる艦である大淀が居た。
そして次に。自分を第三者的視点で捉えてみた。

はだけた少女の服を掴み、抵抗するなと叫ぶ成人男性。
それを見て何を思うだろうか？

不思議と気分は落ち着いていた。
悍ましい笑みを浮かべた彼女に対しても。
もはやなんの感情も起こらなかった。

「懲罰房の中の気持ちは一体どんなだろう」
ただ、そんな事をボンヤリと思っていた。

そして身体の反射がそうしたのか。

自己の意識がそうさせたのか、一言叫んでいた。

「俺は悪くねぇ!!」

おわり

## 朝潮は拾う

「ん？ああ、ありガッ」

そのトンチキな発音に目の前の少女、朝潮はキョトンと小首を傾げる。彼であろうと好き好んでこんな珍妙な発音をした訳ではない。普通に礼を言いたかった。

だが、落とし物…彼女の手の内にあるものが動揺を誘い、そうはさせてくれなかったのだ。

朝潮が拾っていたのは避妊具…

所謂『ゴム』だった。

「ち、違う！それはその…落とし物で！

物が物だから取りにいくのも恥ずかしいだろうと持ち主不明箱に入れてこようと…！」

一言一句違わぬ真実だ。賭けてもいい。

だがこれは、どう聞いても嘘か言い訳にしか聞こえないような言い様だろう。

だが朝潮はその態度に怪訝な態度を見せはするものの、軽蔑だとか、疑念などは抱いた様子は無い。

「？そうなのですか？」

と、不思議そうにするだけだ。

…嗚呼、もしかして。と。

（…知らないのか？何に使うのか）
騙されないようにと、最低限の性教育は行われている筈。しかし教育担当がまだ彼女には早いと判断したのか、はたまた、教えてもらってはいるが知識と現物が頭で結びついてないだけなのか。
いずれにせよ、命拾いをした。

…そう、ひとまずは。

しかして彼は気を抜けはしなかった。
この状況のそれは（社会的な）死を意味していた。

何故ならこの年頃の少年少女、その知的好奇心は異常と言ってもいい。故に次に来る言葉は…

「…あの。これは一体何に使う物なのでしょうか？」

ほら来た。
逃れ得ぬその質問にそう思い、歯噛みをしてその衝撃に耐え凌ぐ。予測が無ければ即死だった。

「…あ！す、すみません！
急に、その…質問をしてしまいまして！」

「いや、良いんだ。『聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥』とも言う。ちゃんと質問をするのは偉い事だぞ」

そう答えると少女は、嬉しそうに、誇らしげに笑う。出来る事ならばその微笑ましい光景を享受していたいものだったが、しかし状況はそんな悠長な事を許してはくれない。

さて問題は、どう説明するかと言う事だ。

嘘を言うか？
否、それこそ信頼を失うだろう。
では嘘を吐かず、本来の用途を話すか。
…否、彼自身の心が承服しない。
ギリギリおかしく思われない程度の間の、その後。こう答えた。
「……そうだな、どうしても知りたいのなら。
後で自分で調べてみるといい。俺からは少し言えないからな」

辞書に責任転嫁する事にした。
汚いと、卑劣だと、姑息だと言うがいい。
だが最早彼女の知識への欲求は止められない。
しかしそれをここで教えるなぞしたら…
…それを思うだけで怖気が襲う。
故にこの後回し、盥回し。間違いなく愚かではあるが、極限状態の男の思考には最早そのような方法しか浮かばなかったのだ。

朝潮の顔を、窺い見る。
渋い顔だ。しかしそれは、相変わらず疑念ではない。むしろ、信頼に基づくその顔。

何か、嫌な予感がした。

「…なるほど、極秘指令と言う事ですね」

「は？」

「お任せ下さい。
この朝潮、完遂してみせます！」

そう言うとビシィと華麗な敬礼を行い…

そして、それを持ち帰ろうとする。

「ちょっちょちょ！

待った朝潮、何だ、何がどうしてそうなった！」

しどろもどろにただ、心の声をそのまま口から放つ。

「はっ、司令官の焦り方の様子からしてこれを危険物だと考えました！そしてそれを処分する様任ぜられたのだと思いまして！」

そうだな、尊厳やらなんやらが吹き飛ぶ危険物だ。…と、そうじゃなくて。

（……俺のせいかァ～～っ……）

脱力と共にへたり込む。

「…違、かったのでしょうか…」

顔を桃色に染め、もじもじと思い違いを恥じる朝潮。可愛らしい。

しかし次の行動は…

…乾いた紙の音が鳴り、『落とし物』の封が開かれる。

へ？と。息が抜けただけの無様な声だけが軍人から漏れる。あまりにも急な事だったので、何も反応すらできなかった。

「これは…風船でしょうか？」

「あさ、朝潮？何故開けた？」

「…す、すみません、つい……」

ハッとしたように、顔を伏せる。

そうか、その慇懃、丁寧な言葉遣いから忘れていたがまだ彼女は子供だ。好奇心のまま身体が動いてしまう事もあるだろう。

「……そうだな。これは落とし物だ。誰かのものだから勝手に中身を見てはいけないぞ」

「！確かに…申し訳ない事をしました…」

「いや、それを恥じ、反省が出来るなら、それで良い。俺はお前みたいな賢い子を誇りに思うぞ」

しゅんと落ち込んでいた姿から一転、嬉しそうに微笑む。

そうして俺はその『落とし物』を朝潮から取り上げようと…

「…それで、危険物でないなら結局これは何なのでしょうか？」

そのまま流せなかった。チクショウ。

「い、いやだな、これは…」

……いつもだ。こういう、最悪の状態。

こういう時に限って、さっきまで無かった、人影を感じる。

嗚呼そうだ、それは即ち、死の気配だ。

横を徐ろに向く。そこには鳳翔が居た。

前を向く。避妊具の中身を手に持つ少女。

自分を鑑みる。脂汗だらけの成人男性。

役満だ。投了だ。

鳳翔は困ったように顔を伏せる。

その顔は赤く染まっている。気まずそうな顔。

しかし、次に聞こえる言葉は罵倒ではなかった。

「…お、おおかたは分かりました。恐らく…その落とし物をめぐって話していたんですよね」

死を受け入れる準備をしていた彼にとって、その言葉は、予想外に尽きた。

「あ…はい。そうだ、鳳翔さんなら知っていませんか？」

「…そうね。ふふ、朝潮ちゃんには少し早いかしら」

そう、慈母の如き笑顔を浮かべ少女を撫でるその姿は正しく女神だった。

朝潮はその一言に不服そうではあったが、一旦は納得したようである。

それだけではない。今度はこうも言った。

「提督。その落とし物、私が置いてきましょうか？」

「なっ…いやいや、流石に悪いですよそんな」

「いえ、物のついでですから」

どうやら近くを通る用事があるらしい。

正直、もう持っていたくはなかった軍人はそれを鳳翔へと手渡した。

これで、何もかもが解決したのだった。

……

---

「…はぁー、マジ助かった……」

そう、部屋で一人息を吐く提督。

結局、落とし主不明のアレは、次見た時には無くなっていた。持ち主が回収したんだろう。

これも鳳翔のお陰だと、そう思う。

一つ残る疑問としては、あの『落とし物』は一体誰のものだったのだろうという事。

…ふと、頬を赤く染めた鳳翔を思い出した。

何故、すぐにあれが落とし物と分かったのか？

……

「ハハ、まさかな」

頬を軽く叩き、失礼な妄想を一笑に付した。

おわり